

十二月感泣集

石段

僕は無限の石段を登る
影が足早に逃げはじめる
つかまへようとして両手を伸ばすと
影は身をすぼめ頭をもたげて走る
するする　するする

人に

重なりあつてゐる黒い雲を切つて
日射しがするどく洩れてゐる
木の間をすぎて地上に及ぶ
苔はあざやかな緑
しめりけの一点
踏みしめてゐるお前の足
素足にも光は及ぶ
混乱した自分を求めてゐる自分の姿はそれなりに存在感がある
少年の群れが追つてきて
僕に石を投げつけることもある

屋根

ねむりから覚めた
電話のベルが鳴つてゐた
はげしい風の音に気がついた
「朝早くから失礼だとは思ひますが
お宅の屋根がめくれあがつてゐますのでお知らせします」
近くに住む女の人からであつた
外に出て斜めの角度から屋根を見上げた
龍の首のやうにめくれあがつて
トタンが細長く空に立つてゐた
はげしく音をたてて　身もだえして
生きてゐるかのやうに伸びをして僕を威嚇した
僕は家を失ふことになるのか
茅葺であればゆがんだ菱型になつて
空を飛んで行つてしまつたであらう
僕の家の場合のはげしい音をたてて
千切れきれないで大空に喰らひかかつてゐる
棟梁に電話をかけた

噴水

噴水の音ははつきり録音されてゐる
蝉の声も
カラスの声も
あの時の僕のつぶやきも入つてゐる
「ライターの火がつかないんだよなあ」
ポケットのマッチは昨日捨ててしまつたばかりなのだ
煙草を吸ひながら噴水を眺めたかつたのに
僕には噴水の白いほとぼしりが見えてゐた
「失策の緊張感の中でテープを廻すより仕方がない」
テープには
蝉の声 カラスの声 噴水のしぶき
加へて僕の無念
それは音としてではなく気分として入つてゐる

人に

またここに来てゐます
それぞれが色変りの煉瓦
八棟の建築に囲まれた一面
ゴンドラ一艘を浮べた人工の川がある
ベネチア風の橋もかかつてゐる
「僕はシェイクスピアの世界ではなく
紅樓夢の世界として空想をひろげたい」
「どうしてでせう」
一棟ごとに少女を住まはせてみようといふのかな」
あなたは眉をひそめてかすかに不快を示した
あなたをその一人にしたいなどとは言はなかつたのに
いまも 誰をそこへ住まはせようか
過去何十年かのあひだにめぐり逢つた女の人を
作者 曹雪芹になつたつもりで
あれこれと思ひ出しては心のままに出し入れしてゐるのです
一瞬のあなたの表情の変化も
まんざらではなかつたので
どうしようかと迷つてゐるのです
新建材の煉瓦で建てられた八棟に囲まれた一面
また僕はここに来てゐるのです

追悼

1 高木 恂

あなたがこの世を去られたと知りました
あなたの事を考へてゐます
黒板一面にこまかく美しく書かれたあなたのたくさんの字
あなたの授業の次が僕の授業でした
僕の乱雑な字を書くために黒板ふきでゆつくり消しました
改良されたとはいへ粉が舞ひました
粉があたゝかく僕をつつみました
僕は活力を得て姿勢と声をあなたに似せました
僕もこの一コマをすませたら
「よつ」と自分に声をかけるやうにして教壇を下り
しづかに足早にあなたを追つて行きます
チヨビ髭の温容を追つて

2 堀内達夫

僕がわすれることの出来ないのは
「堀内医院」の門燈と
「麥書房」の看板である

堀内医院と書かれた門燈と
麥書房と書かれた看板と
僕の年月の前後をはさみつけてゐる

土手町で高校生だった僕と
小学生だった堀内君とすれちがつてゐたかもしれない
花びらをあびながら
秋風に吹かれながら
吹雪の中で
豊橋で 神保町で
君と僕と互ひに気づかずに歩くことがあつたとしても不思議はない
けれども これからはそれは絶対にあり得ない
悲しいけれど
さうなのだ

3 西垣 脩

室内に横たはる君を
たくましい一幹の竹と感じた
十三回忌をむかへるのだつてね
春には 月の光がチラチラと
夏には 小雪がサラサラと
いつれ僕も入りこむ
ずれた君の季節の中に